
『めぐり愛』 (続・夏の奇跡)

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『めぐり愛』（続・夏の奇跡）

【Nコード】

N3726B

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

一年あまりの辛い時間を過ごした俺は、ようやく菜美との新しい暮らしを始めた。菜美が故郷・萩から娘を伴って大阪へ出てきたのだ。俺は菜美の娘・絵美を、自分の娘として愛する自信もあった。夢にまで見た新しい家族。しかし、俺達の前に待っていたのは、甘く平穏な毎日ばかりではなかった。

第一章「家族」 その一（前書き）

この作品は、前作「夏の奇跡」の続編です。まだ前作をお読みでない方は、是非「夏の奇跡」からお読み下さい。前作では、多くの方に、暖かい励ましをいただき、ありがたいことに、「是非続編を・・」とのお声もお寄せいただきました。皆さんの声に後押しをされるように、今回、執筆開始致しました。連載回数は未定ですが、お付き合いますようお願いいたします。

第一章「家族」 その一

第一章「家族」

七月十一日・日曜日、朝の飛行機で菜美が大阪に向かっていった。娘の絵美は、実家の母親に預けていた。

一学期の終わりまで萩の小学校へ行かせ、夏休み明けの二学期から大阪の小学校へ転校させることにしていた。明日、転入先の小学校へあいさつに行くことにしていた。

絵美は四年生だった。活発で、明るい性格の娘だった。勉強も比較的良くできた。

「塾などへは、通わせたことがない」と菜美が言っていたから、幼児期に菜美がしっかりと「躰け」をしたからなのだと思えた。

「躰け」の出来ている子は、大抵の場合、勉強も出来る。

例えば、「約束を守る」とか、「人の話をしっかり聞く」とか、「決められたルールは守る」とか、そんな当たり前のことが出来ていれば、自然と勉強もそこそこは出来るものだ。

あの「事件」の時、絵美は三年生だった。

絵美がどれ程ショックを受けたかは、想像を絶するものがある。しかし、この小学三年生の少女は、気丈にも、大阪から萩への道中

でも、打ちひしがれる

母親を慰め、励ましたのだという。その話を菜美に聞いたとき、俺は心から感動した。

まだ小学三年生の、この少女のどこに、そんな力強いものがあるのかと思った。

見知らぬ萩の小学校へ転校を余儀なくされた時も、その日の中にクラスの中に幾人かの友達を作り、祖母と憔悴した母親が待つ家に、新しい友達を連れて帰った。

その後も、絵美の明るさと優しさに、事件がもとで、声を失うほどショックを受けていた菜美は、どれ程慰められ、勇気づけられたことだろうか。

伊丹空港の駐車場はかなり混雑していた。午前中の到着便の多い時間帯だった。

しばらく並んで、やっと車を入れたときには、もう菜美の便が着いた時間だった。

慌てて到着ロビーに向かった。

到着便の出口から、ぞろぞろと人並みが吐き出されてきた。

菜美を探した。

人の列がもう終わってしまっても、見つけることは出来なかった。

へ今の人たちは、違う便の乗客だったのか」と思って、もう一度、到着便案内を見直した。

やはり間違いなかった。石見空港からの便だった。

辺りを見回したが、菜美の姿はどこにもなかった。

不安に駆られた。

その時、突然後ろから、声がした。

「じゃーん。とうちゃくく。」

「おお、なんだ。着いてたのか・・・心配したぞ。」

「あれ、そんなに心配した？一番最初に出て来たのにいてくれな
いから、また寝坊してる
のかと思ったわ。あそこの出口で待ってたら、慌てて入って来るの
が見えたから、
ちよつと驚かそうかなって思ってた。」

ブルーのワンピースの菜美はそう言って、にっこり笑った。
笑ったその顔が、みるみる崩れていった。

笑いながら涙をこぼしていた。

人目は気にならなかった。俺は菜美を抱きしめて言った。

「お帰り。」

「うん。ただいま。」

菜美は俺の首に廻した手を、なかなか解こうとはしなかった。

途中のレストランで食事を済ませて、二時過ぎにマンションに着
いた。

ジーンズとTシャツに着替えた菜美が、買い物に出たいと言った。
菜美と絵美の分の日用品や、食器やらを買いそろえたいらしかった。

「へ疲れているだろうから、ゆっくりしてからにすれば」と言ったが、菜美がぜひ行きたいと

言うから、付き合った。一通りの物を買そろえて、帰ったのはもう夕方だった。

「ごめんね。疲れたでしょ？」

菜美は買ってきたばかりの物を、てきぱきとそれぞれの場所に仕舞いながら、そう言った。

「いや、大丈夫だ。」俺はそう言ったが、本当は、少し疲れていた。

ごろっと畳に寝ころんだ。

「ねえ、見て。」洗面台を指さして、菜美が声をかけた。

見ると、洗面台の横の歯ブラシ立てに、三本の真新しい歯ブラシが、立ててあった。

「ほんとにここで、暮らせるのね。こうして、歯ブラシを立てるのが、夢だったの。」

菜美はそう言って、寝ころんだ俺の横に座った。俺は

「そうだよ。これからずっと一緒だ。」

そう言って、菜美の膝に頭を乗せた。

菜美の両手が俺の頭を優しく包むように抱きしめた。

見上げた菜美の顔に、涙が光っていた。

第一章「家族」 その二

翌日の月曜日、地元の小学校へ行った。

あらかじめ萩の小学校から連絡を入れてくれていた。校長と、絵美の担任になる予定の女性教師に会った。

込み入った事情を、出来るだけ手短に話した。

へ気持ちの明るい子ですが、あまりにめまぐるしく環境が変化していますから、

その点が心配なのです。どうかよろしくお願いします。〽と頼んだ。

校長も、担任も、快く引き受けてくれた。

担任の女性教師が信頼できる人柄であることは、少し話したただけで解った。

帰ってから、菜美とへあの先生なら安心だね。〽と話した。

四日間を俺の部屋で過ごして、菜美はまた萩に戻っていった。

二十日の終業式を終えたら、絵美と一緒に引っ越して来る予定にした。

夏休みは、三人で、ゆっくりと過ごすつもりだった。ちょっとした旅行も計画していた。

二十一日の午後、菜美は絵美と一緒に、俺のマンションにいた。

絵美に会うのは、まだこれが二度目だった。

「こんにちは。今日からここで、一緒に暮らすからね。よろしく。」
そう言って俺は、かなりぎこちない面もちで挨拶をした。

「はい。よろしく願います。」

絵美はそう言うと、ペコッとお辞儀をした。

小学四年生の少女の方が、余程落ち着いて、しっかりしていた。

それから、夏休みが終わるまでの四十日間を、俺は出来るだけ多くの時間、

三人で過ごすようにした。

仕事の予定は、極力詰めて、あちらこちらへ出掛けた。

遊園地、海水浴、白浜温泉への旅行。

絵美の大好きなプールは、近くにあったから、何度も出掛けた。

初めは、緊張していた俺も、絵美の子供らしく明るい性格に助けられ、

短い間に、ほとんど奇跡的なペースで、うち解けてることが出来た。

菜美はそんな俺に

「あなた、ありがとう。でも、お仕事、無理しないでね。じっくりでいいのよ。」

絵美はあなたが好きなのよ。だから、大丈夫よ。」そう言って気遣った。

俺は、決して焦っていた訳ではなかった。だが、一つだけ気に掛かっていた事があった。

それは、絵美が俺のことを、どうとも呼ばないことだった。

パパ、お父さん、もしくは、おじさん。そのどうとも言わなかった。

菜美は絵美に、へ「お父さん」と呼べば?」と言ったらしいが、どうしてもその言葉が出ないらしかった。

実の父親のことをへ「パパ」と呼んでいたらしいから、俺をパパと呼ぶのは抵抗があるらしい。

それで、菜美はそれなら「お父さん」と呼べばと言ったらしい。菜美のことは、ママで、俺をお父さんだと、ちぐはぐだが、仕方がない。

だが、そんな俺の気持ちを思いやってくれたのか、夏休みも、もうすぐ終わろうかという日、文具店で新しいノートやシャープペンシルなどを買っていたとき、ふいに、絵美が言った。

「ありがとう。お父さん。」

「うん、ああ、うん。」

不意打ちを喰らって、俺は思わず声が詰まった。

涙もろい菜美が、目を潤ませて俺に言った。

「あなた、ありがとう。」

この夏休みは、俺達三人にとって、一生忘れられない夏休みになった。

第二章「転校」 その一

その日。長い夏休みが終わった翌日。

新学期の一日目は、子供達にとつてかなり特別な日だった。

宿題を完璧に済ませた子供は、元氣一杯に学校へ行き、反対に、まだ出来上がって

いない子供は、怖々という風に校門をくぐった。

それでも宿題はともかく、久しぶりに合う友達とのおしゃべりは、殊のほか楽しく、

担任の先生が教室に入って来た時も、教室のざわめきは全く止まなかった。

「はーい、みんな早く席に着いて。静かに！」

四年三組の担任・榊原節子が、声をあげた。

「オーイ、は・や・く・しなさい。」やっとの事で、子供達がバラバラと席に着き始めた。

「おはよう。どう？夏休みは楽しかった？元気にしてたかな？」

「はい。」

「めっちゃ楽しかった。」

「もう一度、夏休みしたーい」口々にそう言ったあと、子供達は、ようやく榊原先生の隣に

立っている女の子に気づいた。右手の入り口にはどうやらその子の母親らしい女の人が、

ひっそりと立っているのも見えた。

「あれー、転校生？」そう言って大声をあげた男子児童に、

「そうよ。転校生。今日からみなさんと一緒に勉強するお友達です。」

紹介するね。」

節子は黒板に〈望月絵美さん〉と書いた。それから、ひらがなで〈もちづき えみ〉とふりがなを書き加えた。

八月の最後の金曜、俺と絵美は正式に夫婦になった。午前中に二人で役所に行き、婚姻届を出した。

菜美と、絵美はその日から、俺と同じ「望月」姓になった。

「もちづきえみ」誰かがそう声に出して読んだ。

「そうよ、えみちゃん。山口県から転校してきたの。仲良くしてあげてね。」

節子の声に、何人かが「はい。」と子供らしく返事をした。

「じゃあ、望月さん、自己紹介して。」

節子にそう言われると、絵美はこっくりとうなずいた。

「望月絵美です。山口県萩市から転校してきました。みなさん、よろしく願います。」

そう言うとき絵美は、教室の真ん中に向かって、丁寧にお辞儀をした。

パチパチと気の利く何人かが拍手をした。

「うわー、すごい。ハキハキとした素晴らしい自己紹介ね。」

そう言って節子に褒められると、絵美は少しはにかんだように、それでも嬉しそうに

笑って、入り口で心配そうに見つめている母親を見た。

「じゃあ、とりあえず、あの窓側の席に座ってくれる？」そう言つて節子は、窓側の列で

一つだけ空いている席を指さした。

「ゆうこちゃん、いろいろと教えてあげてね。」節子は、後ろの子に、そう声をかけた。

「はい。」ゆうこと呼ばれた子は、そう元気よく応えると、へおいでという風に、絵美に

向かつて手招きをした。絵美は、もう一度母親を見やってから、席に向かった。

節子は、入り口近くで佇んでいる母親に近づき、

「もうお帰りいただいても大丈夫ですよ。」と声をかけた。母親は、

「それでは、よろしくお願いします。」と言い、節子に向かつて深々と頭を下げてから、

教室を出ていった。

「じゃあ、出席をとるね。・・・足立君。」

節子は教壇に戻ってすぐ、そう言つて出席をとり始めた。

第二章「転校」 その二

教室の席は、きれいに埋まっていたから、全員揃っていることは一目瞭然だった。

それでも、節子は丁寧に一人づつ名前を呼び、児童が「はい」と応えると、何かしら一言尋ねるなどして、随分ゆっくりと出席をとっていた。

この小学校でも、ここ数年、〈学級崩壊〉や〈いじめ〉が問題になっていた。

〈学級崩壊〉授業中に勝手に席を立ったり、教室中を歩き回る児童達。

教師の注意など、彼らにとってはただの耳障りな騒音でしかなかった。そうして、教師が「最後の手段」を行使しようものなら、途端に「体罰だ」と騒ぎ出すのだ。

もちろん、出来の悪い親も一緒になって。

ほとんどの教師達にとって、いったん始まった学級崩壊の流れは、止めようがなかった。

〈いじめ〉に関してもかなり深刻な状態だった。

いじめが元で登校拒否に陥っていると思われる児童の数は、年々確実に増えて、

クラスに一人や二人は必ずいた。

いったん登校拒否に陥ってしまうと、そこから救い出すことは容易ではなかった。

教師が足繁く自宅に通ったり、比較的仲の良さそうな児童に迎え

に行かせたりして、
やっこの思いで登校させても、たった一言、いじめっ子が言葉のナイフを振りかざせば、
それで終わりだった。

いや、どんなひどい言葉でもかけられているうちは、まだ救いがあるのかも知れない。

いじめられた経験のある子達は異口同音に言う、「一番辛いのは無視されること。」だと。

ところが、この節子のクラスだけは様子が違った。

授業態度、クラスの輪、どれも非の打ちようがなかった。

他のクラスの影響が及ばないはずはなかったが、それを節子は持ち前のきめ細かな気配りで、〈小さな芽〉の間に摘み取っていた。

何より節子は、子供達にも自然と伝わる、「慈愛」に満ちていた。節子は子供達を愛していた。教師という職業を愛していた。

そのことが、他の教師との〈ちよっとした差〉で〈大きな違い〉だった。

「ただいま、ママ、節子先生からお手紙。」

転校して三日目の金曜日、今日も絵美は、元気に帰ってきた。

絵美は、榊原先生を〈節子先生〉と呼んでいた。

違う学年に、榊原という男性の教師がいたことから、児童も、同僚教師も、

「節子先生」と呼んでいたのだ。

絵美は菜美の顔を見るとすぐに、この半日の学校での出来事を、
楽しそうに話し始めた。

菜美は絵美のとりとめのない話を、安堵の気持ちで聞いていた。

小学校では、始業式の日から数日は短縮授業だった。その間の授業は半日で終わる。

週が変わって、来週の月曜日には、通常通りの6時間授業になると聞いていた。

菜美は、絵美に昼食のサンドイッチを用意してから、先生からの手紙を読み始めた。

『望月様

本日で三日目。絵美さんは、今日も楽しく一日を終えられました。持ち前の明るさからでしょうか、もうすっかりクラスにとけ込んで、みんなと仲良く、
楽しく過ごされているように思います。

どうかご安心下さい。なにか気に掛かることが、ごさいまいしたら、いつでも遠慮なく

ご相談下さい。四年三組担任・榊原節子』

短いが、心のこもった手紙だった。

菜美はへ節子先生で本当に良かった。＼と思った。

子供も親も、教師を選ぶことは出来ない。どの教師に受け持たれるかなど、

偶然の巡り合わせでしかない。

だから、菜美のように、〈この先生でよかった〉と思える教師に子供を預けられた親は、幸せなのだ。菜美も、その事は良くわかっていたから、節子先生に感謝すると同時に、出会わせてくれた〈偶然〉にも、心から感謝した。

その夜、俺はいつもより早く帰った。

この四、五日は、忙しく、絵美と一緒に夕食を摂ることが出来なかった。

土曜、日曜の二日間、また出張の予定が入っていたこともあり、その分、

〈今夜は三人でゆっくりしよう〉と思っていた。

「節子先生がね・・・」夕食の間中、絵美は、先生との楽しい語らいを一生懸命聞かせた。

俺は、絵美の嬉しそうな顔と、隣で微笑んでいる菜美の優しい笑顔に囲まれ、これ以上なく幸せな気分だった。

〈幸せ過ぎて怖いわ〉

夏休みが終わろうとする数日前、絵美が俺を〈お父さん〉と初めて呼んだ日の夜、ベッドの中で、菜美が言った。

俺も同じ気持ちだった。今までの人生で、これほど、安らぎと、幸福感に満たされていた時間は無かった。

夕食を終え、菜美と絵美を先に風呂に入らせた。

絵美は、昼間はしゃぎすぎた疲れからか、ソファでテレビを見てると思っていたら、
いつの間にか、眠ってしまっていた。

子供らしい、可愛い寝顔。俺は、絵美をそっとベッドまで運んだ。
いとおしさが込み上げてきて、絵美の額にそっと口づけを言った。

「おやすみ。」

絵美の寝顔に見入っていると、菜美が隣にやって来た。

「あなた、ほんとに、ありがとう。」菜美は俺の胸に顔を埋めて、
言った。

「泣いてるのか？」

「うん。なんだか、キュンってなったの。変ね。」
菜美はそう言って、涙をぬぐった。

「嬉しくて泣くなら、いくらでも泣いていいさ。」
俺は菜美をそっと抱きしめた。
細い肩にそっと手をやると、菜美の潤んだ目が優しく俺を見ていた。

俺は穏やかで満たされた気分には酔いしれた。たぶん、菜美も。

数日後に訪れる災厄の影に、気づきもせずに・・・。

第二章「転校」 その三

月曜日、今日から通常通りの授業が始まろうとしていた。節子は、いつも以上に気持ちを引き締めて、教室に向かった。

短縮授業の間は、まだまだ〈夏休み気分〉の抜けなかった子供達に、気持ちの切り替えをさせなければならなかった。

節子が教室に入ると、子供達は、慌てたように席に着いた。日直の子供が「起立」と声をかけると、全員が一斉に立ち上がった。

「礼」

「おはようございます。」元氣な子供達の声に、節子は、笑顔で応えた。

「はい、おはようございます。みんな元氣？」

「はい。」「おー。」子供達からは、口々に元氣な声が帰ってきた。

「ようし。今日からは、六時間授業だからね。健太君、お昼で帰っちゃだめよ。」

節子が一番前の席のやんちゃそうな子供に向かってそう言うのと、子供達が一斉に笑った。

「帰らないよー」健太と呼ばれた子供も、そう言って嬉しそうに笑っていた。

みんながもう一度笑ったところで、節子が言った。

「健太君が帰らないなら、大丈夫ね。それじゃあ、今日も元気にやりましょう。」

出席をとるから、いつも通り、元気に返事してよ。」

節子は子供達一人一人の顔色を見ながら、いつも以上にゆっくりと出席をとっていた。

節子はそうして、子供達の体調などを、朝の返事の声から判断していた。

男子児童の分が終わり、女子児童の半分が終わろうとした時、教室の入り口がほんの少し静かに開いた。

扉がゆっくりと半分ほど引かれた後、さらに半分が開けられた。

節子は、すぐにはその異変に気づかなかった。

入り口の近くに座っていた女子児童の一人が、へきやつと小さな叫び声をあげ、急に席を立った。

節子はギョツとして、声の方を見た。

ジャージ姿の若い男が、いつの間にか、そこに立っていた。

「あっ！」

節子がそう声をあげたのは、正体不明の男を見つけたからか、それとも、男の手に光る

ジャックナイフを見たからなのか。

とっさに叫んだ。

「誰？何の用ですか！出て行きなさい！」

男はその声を無視するように、入り口からじつと教室の中を見回した。

「きゃー」

「うわあー」

事態の異様さに気づいた子供達が、そう口々に叫んで、教室の後ろの方に向かって、逃げ出した。その後を追うように、節子も教室の後ろへ向かって走った。

子供達の叫び声が教室中に響いた。

「みんな、逃げなさい。」

節子は教室の後ろ側に向かって走りながら、出入り口を指さした。扉の近くにいた男子児童が、真っ先に勢いよく飛び出した。他の児童も続いた。

その時、ジャージの男が、教室の中程に躍り込んできた。

廊下側の席の児童は、既に教室の外に逃げ出していたが、窓側の席の児童は、身動きが出来なくなった。

教壇から向かって、右の奥の角を背に、十人ばかりの児童が残された。

節子は、残された児童を背中に庇うように立つと、男に向かって

叫んだ。

「何をするの？早く出て行きなさい。」

そう言って、今度は天井に向かって叫ぶように、
「助けて〜」と大声を出した。

男は一瞬驚いたようだったが、すぐに、
「うるさい。」と短く言った。

男が初めて発した声だった。

妙に落ち着いたその声を聞いて、節子は、初めて本気で恐怖を感じた。

ジャックナイフが、窓からの光に、キラッと鈍く光った。

恐怖で足が震えた。震えはすぐに身体全体に拡がった。

もう一步も動けない気がした。

「きゃー」節子の後ろで、子供達が、泣き叫んだ。

第二章「転校」 その四

「コロス。」男が呟くように言った。

〈コロス?〉節子は朦朧とする頭の中で、まるでその言葉の意味が理解できずにいた。

〈殺す〉簡単な言葉だった。

節子の三十四年の人生を終わらせるのに、充分な、簡単な言葉だった。

左の脇腹から胸の方に向かって、〈スッ〉という感じで、何か熱いモノが入ってきた。

何の抵抗もなく入ってきた〈それ〉は、難なく節子の身体の内側まで達した。

一度抜かれたナイフは、更にもう一度、そして、更にもう一度、節子の身体を貫いた。

「いやゝっ!」そう叫んだのが、その日、子供達に聞かせた最後の声になった。

節子は膝から崩れるように、前のめりに倒れ込んだ。

教室の床が目の前に来たとき、節子の中の何かが、不思議にも右手を動かせた。

節子の右手が、男の左足のひざの辺りをつかんだ。

男は、膝を折られたような格好になった。

節子が、床に衝突するのと同時に、男は左後ろに、しりもちを付き、さらに弾みで

仰向けに倒れた。〈ゴツン〉と鈍い音がした。頭を打ちつけた。

突然、子供達の前に〈道〉が出来た。

男子児童が走った。他の子供達も、俊敏にその後が続いた。十人近くの子供がほぼ一列になって、出口に向かって走った。

一瞬の後、仰向けに倒れていた男が、頭を振りながら、起きあがった。

右手には、べつとりと血のりの付いたジャックナイフを持ったままだった。

起きあがったばかりの男の前を、最後尾の女の子が走り抜けようとした。

絵美だった。

男の左手が伸びた。

絵美の髪に手が掛かった。

絵美は、勢いが余って、両足を空中に投げ出すように、仰向けに倒された。

床で強く背中をうった。息が止まった。

へううっ／＼苦しい息の中で、必死に見開いた絵美の目に、覆い被さる様に迫ってくる

男の顔と、高く持ち上げられた、右手のナイフが飛び込んできた。

へママ！助けて！

絵美は、ほんの三十分前には、この教室にいてくれた母親に向かって、

声にならない声で、助けを求めた。同時に、ギュッと目をつぶって、襲ってくるであろう

凶器の攻撃に身体を堅くした。

絵美の耳元で、《ドン、グサツ》と音がした。

続いて「ううっ」とうめき声が聞こえた。

絵美はゆっくりと起きあがった。

絵美のすぐ横で、男が俯せに倒れていた。背中の動きがゆっくりと止まった。

男の身体のしたから、真っ赤な血が流れ出していた。

男の足の辺りには、血で滑ったような跡があった。

節子の血だった。節子の身体から流れ出した血に、男が足を滑らせたのだった。

倒れた弾みで、男は自分のナイフで、自分の身体を刺し貫いたのだ。

ふらつく様に教室を出た絵美を、新しい同級生達が遠巻きに見ていた。

絵美の右手にはべっとり血が付いていた。子供達を命がけで守ってくれた節子の血。

騒ぎを知って駆けつけた男性教師が、絵美に走り寄ってきた。

「大丈夫か？」そう言ってから、絵美の手についた血に気づくと、

「どこだ？どこを怪我した？」と叫んだ。

「私じゃない！先生を助けて！早く！お願い。」

絵美はそう言っていると、膝から崩れるように倒れ込み、そのまま気を失った。

第三章「死線」 その一

菜美からの連絡で、俺が市立病院に到着したのは、事件から三時間後の事だった。

総合案内で病室を聞くと、6階だと言われた。6階の看護師詰所で病室を確認した。

絵美は個室に入っていた。病室の表に、警官が一人立っていた。顔色を失っている菜美を、ベッドの横の椅子に見つけた。

「どうだ。」背中からそう声をかけると、菜美は初めて俺に気づいた。

「あなた・・・」

菜美はその後しばらく一言も話せずに、ただ俺にすがって泣いた。

菜美の震えが伝わって、絵美の腕から伸びた点滴チューブが、揺れた。

菜美はしばらくして、ようやく落ち着いたのか、絵美の方を見ながら、言った。

「かなりのショックだったみたい。先生の話だと、軽い打撲だから、今のところ特に心配は無いって言うけど・・・。気を失っているだけだから、目を覚ませば大丈夫だって。」

「そうか・・・事件のこと、来る途中にラジオのニュースでも流れたよ。」

「犯人は教室の中で死んだらしい。・・絵美以外の子供達は、みんな無事だったらしいな。」

「そうだ、先生は？・・節子先生は？」

「わからない・・わからないの。節子先生が子供達を守ってくれたって。」

「・・それで、随分刺されて・・今もまだ、手術中らしいけど。他の病院だし・・容態はわからないのよ。」

「そうか・・怖かったろうな。子供達のためにか・・何とか助かって欲しいな。」

「うん。ほんとに・・ねえ、こんなひどい事件、どうしてなの？
どうして、絵美がこんな目にあうの？ねえ、どうして・・。」
菜美はまた涙ぐんだ。

「さあ、それは・・とにかく絵美のせいじゃない。先生のせいでもないし、
お前や俺のせいでもないよ。全て犯人が悪いんだから。」

俺はそう言って、菜美の背中をさすった。

「ほんと？うそよ。私のせいだわ。絵美がこんな目に遭うのは、全部、私のせい。」

菜美の言いたいことは解った。

菜美が俺と暮らすことにしたから、絵美は大阪へ来た。子供は、親の行くところへ黙って

付いていくしかないのだから。その事で菜美は自分を責めているの

だ。

「菜美、それは違うよ。菜美と絵美を、こっちに來させたのは俺だよ。そういうなら、全部俺のせいだよ。」

俺はそう言って、菜美の目をのぞき込んだ。

「でもな、菜美、俺達は幸せになろうとしたただけだろ？三人で家族になろうとしただけだろ？」

それが間違っていたなんて事は、絶対考えるなよ。」

「・・・そうね。ええ、でも・・・可哀想な絵美・・・」

菜美は椅子に腰を下ろすと、涙をぬぐってから、絵美の頬に手を当てて、

「絵美・・・」と声をかけた。

その時、絵美が少し反応した。

二度ばかり、苦しそうに眉を寄せてから、ゆっくりと目を開いた。

「ママ・・・」

絵美はぼつりとそう言うと、部屋の明かりが眩しいのか、目を細めた。

「絵美！絵美！・・・あなた、絵美が目覚ましたわ！」

菜美はそう言って俺を見上げた。

俺はすぐにインターフォンで、看護師詰所に連絡をした。

「娘が・・・娘が、目を覚ましました。」

その瞬間、俺は、この娘が、生まれ変わって来たような気がした。
本当の俺の子供として。

第三章「死線」 その二

西日本大学附属・南大阪病院、外科第三手術室。

脇腹から胸に向かっての刺し傷は、幸いにもギリギリ心臓の手前で止まっていた。

致命傷になりかねない傷は、腹部の方にあった。悪意のナイフが、下腹部を深く刺し貫いていた。

「止血だ。・・・止血急げ！」

執刀医の杉村が、助手の関川の手元を見て、言い放つ。

ちょうど一時間前、出勤間もない杉村の元に、急患の一報が入った。

救急隊からの搬送中の報告で、

〈患者は三十四才の女性、胸部、腹部他、数力所を、鋭利な刃物で刺され、瀕死の重傷〉と聞いた。

〈節子と同年だ〉そう思った。

搬送されてきた血まみれの患者を見たとき、杉村は我が目を疑った。

「節子！まさか・・・何故だ！」思わず口走った。

手術室に入りながら、救急隊の話す状況説明を聞いた。

「女性は小学校の教師で、教室に侵入した何者かによって刺されたようです。」と、救急隊員が青ざめた表情で言った。

節子の容態が、容易なら無いものであることは、この若い救急隊員にも十二分に解っているのだろう。もちろん、杉村にも・・・

脇腹の傷口を縫合し終えた杉村に向けて、声が飛んだ。

「腹部、・・・止血出来ません。出血、止まりません。」関川の声がうわずる。

「バカ野郎！止めろ！」

杉村は厳しくいいながら、鉗子を取り、腹部静脈を押さえる。

「このまま、じっと持ってる。そつとだ。傷つけるな。そうだ・・・大丈夫だ。」

杉村の視線に、関川が無言でうなづく。

「輸血急げ。」杉村の指示で、看護師が新たな輸血パックをセットした。

その時、血圧計を注視していた看護師から、悲痛な声が飛んだ。

「血圧下がります・・・心拍ゼロ、・・・反応ありません！」

ピッ・・・ピッ・・・ピー・・・

「カンフル！」

看護師が点滴チューブにカンフル剤を注入する。

それを横目に見ながら、執刀医の杉村は、節子の胸の上を、両手でドン、ドン、と叩き始めた。

叩きながら、杉村の目は、厳しく、心拍計と脳波計を見つめる。
・・・ドン、ドン

二台の精密機械の波形は、無情にも、きれいな水平を保って流れていく。

「チャージ！」杉村が叫ぶ。

看護師が、杉村の横に手早くワゴンを寄せた。

「300」

「下がって！」・・・ダーン。

杉村の両手から、今まさに死に直面している、いな、すでに死線を越えてしまったかも知れない、節子に向かって、最後のロープが投げられた。

これを掴み損ねたら、節子は、二度とこの世には戻ってこれない。
い。

・・・

「ありません。」助手の関川が悲壮な声で言う。

スタッフ全員が、ピクリとも動かない機械の波形を、見つめている。
る。

「もう一度。」杉村の声には、祈りが込められた。

（神様、お願いだ、どうか、どうか・・・節子を助けさせてくれ・・・）

「400」

「下がって！」ダ・ダーン！

・・・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・ピッ

「出ました。」関川が興奮気味に叫ぶ。

「心拍再開・・・血圧上がります・・・30・・・35・・・45・・・」
看護師が血圧計の数値を、読み上げて行く。

「ふう・・・よし。」杉村が一際大きく息を吐いた。

看護師が、杉村の額の汗を、手早く拭いた。

「油断するな。このまま止血だ。」

少しばかり安堵の表情を見せた杉村は、すぐに元の厳しい表情に戻った。

（節子、えらいぞ。もう少し頑張れ、もう少しだ。俺が、絶対助けてやるからな）

‘神の手’と呼ばれる杉村の手によって、縫合糸が節子の切れた血管を次々とつなぎ、身体の傷を、塞いでゆく。

三十分後、杉村が額の汗をぬぐいながら言った。「腹部縫合完了。」

「血圧正常、心拍、脳波とも安定。」報告する看護師の声が、心なしか、かすれていた。

「よし。手術は成功だ。だが、あとが大事だ。みんな、よろしく頼む。」

スタッフにそう声をかけた後、杉村は、じっと、節子の青ざめた顔を見ながら、言った。

「もう大丈夫だよ。よく頑張ったな。」

そう言いながらも、杉村は、節子が目を覚ました後、傷口を見たときの、彼女の気持ち、さらに、その後に残るであろう、いくつかの後遺症を考えると、暗澹たる思いを隠しきれなかった。

第四章 「絆」 その一（前書き）

事情により、長期にわたり投稿出来ませんでしたことをお詫び申し上げます。

その間、「ぜひ続きを！」との温かい励ましをいただきました読者の方々に、深くお礼申し上げます。

今後、鋭意執筆いたします。

ご感想などお寄せ下されば幸いです。

第四章 「絆」 その一

事件の一週間後、絵美は、最後の精密検査の結果異常もなく、無事、退院した。

テレビは、連日この事件を取り上げた。

数年前の、同じ大阪での児童虐殺事件と比較し、学校の保安上の不手際も指摘していたが、俺たちから保護者からは、学校を非難する声は、ほとんど上がらなかった。

事件では、学校も、教師も被害者なのだ。〈部外者、特に、無責任なマスコミになど、あれこれ言われたくない〉と言うのが、関係者の素直な気持ちだろう。

事件後の、学校の対応は、それ程まずいものではなかったし、第一、もっとも深い傷を受けたのは、今も入院中の、教師なのだ。犯人は、校庭のすみのフェンスから侵入していた。それを防ぐには、学校を刑務所のような壁で囲むしかない。それは無理だ。

俺は、テレビや新聞を、出来るだけ見ないようにしたし、菜美や、絵美には、絶対に見せたくはなかった。被害者への取材については、学校側から自粛を申し出たから、公式の記者会見以外に、被害者への直接の取材は、いまのところ押さえられていた。

病院の前に、テレビ局の車が止まっていたのは、一週間ほどだった。今は、もう来なくなった。わっと押し寄せ、さっと忘れる。マスコミの動きは、いつもそんなものだ。

節子は、奇跡的に一命をとりとめたものの、手術後も一時期容態

が悪化したりして、予断を許さない状況が、二週間近く続いた。

医師達の賢明な治療で、その後、比較的順調に回復に向かったが、まだリハビリのため、入院していた。

あの忌まわしい事件から、三ヶ月半が過ぎていた。冬が足早にやって来た。

師走の風が、黄色く色づいた銀杏の葉を揺らしていた。

菜美は、節子の容態が安定した頃から、ほとんど毎日のように、病室に通っていた。

〈絵美の命の恩人だから〉菜美はそう言って、見舞いを続けていた。

日曜日には、絵美を連れて出掛けた。日曜日には、他の子供達も見舞いに来たりするから、〈病室の中は、まるで小さな教室のようになっているわ〉と、菜美が言っていた。

〈節子先生は、退院したら、教師を続けてくれるかしら？〉
菜美が俺にそう尋ねた。

「わからないな。」（ショックが大きすぎる）俺はそう思った。

だが、あの先生は子供達に宛てた手紙で、こう綴った。

「みんな、心配かけてごめんね。もうちょっと待っててね。みんなが、五年生になる前には、教室に帰れる様に頑張るからね。だから、それまで、みんなで仲良く待っててよ。」

菜美は、病室に通う中に、節子先生とまるで友達のようにうち解けた。偶然にも二人が同じ年だったことも、仲良くなる理由だったか

も知れない。

あるとき、先生の方から「先生って呼ばないで、節子でいいわよ」と言われたそう。今では、二人の時には、お互いに、節子さん、菜美さん、と呼び合っている。

菜美が、大阪に来て、初めて心を許した友達が出来たのだ。思えば不思議な縁だった。

こんなにも短期間に、二人が心を通わせ合ったことに、俺は驚きながらも、納得できる気持ちもあった。

二人は価値観が似ていた。

俺はその事を、節子先生と菜美が病室で語り合っている時の様子を見て、感じていた。

好きな歌、好きな花、感動した映画、好きな言葉、そんなものが、二人は不思議と同じだった。お互いに、無理矢理合わせている訳では決して無かった。その事を節子先生も、菜美も心から喜んでいた。

二人はお互いの生い立ちや、悩み事など、なんでも話せる間柄になっただけだった。

菜美は、俺との出会いや、あの事件のことも、詳しく話したようだった。菜美にとって、そうして話せる友が出来たことは、何より、幸せなことだった。

節子も、ずっと抱え込んでいた悩みを、菜美に話した。

杉村医師との話。菜美は俺に、「節子先生の恋の悩みを聞いたわ」とだけ言って、それ以上詳しいことは何も話さなかった。

節子と杉村は、もう七年も付き合っていた。

お互いの年令を考えれば、長すぎる恋だった。杉村には以前から結婚を申し込まれていた。節子も杉村を愛していたから、その申し出は嬉しかった。だが、節子は、杉村の外科医としての技量を良く知るがゆえに、

「この人と結婚するなら、自分は仕事は辞めて、杉村を支えることに専念しなければならない」と、そう思っていた。

「仕事を辞めてくれ」と杉村が言ったわけでは無かった。だが、杉村が内心そう願っていることは、節子にはわかっていた。

杉村は、子供を望んでいた。そのためにも、早く結婚したがっていた。

節子は、教師を続けたかった。辞めたくなかったのだ。だから、杉村との結婚に踏み切れずにいた。

入院中に、杉村が節子に聞いた。「まだ、教師を続ける気か?」と。

節子は、しばらく黙った後、「ええ。」そう短く、それでもはっきりと答えた。

「そうか。」杉村はそれだけ言うと、もう二度とその事には触れなかった。

その夜、節子は病室の夜を、声を押し殺して泣き通した。明け方、涙が枯れた。

「退院したら、別れよう。」節子はそう決めた。

「私は、もう子供など産めない。」憎むべき凶器が、節子の身体を、深く傷つけていた。

第四章 「絆」 その二

「ママ、行くよ。行って来まゝす。」

絵美は勢い良くランドセルを担ぎ上げると、ドアを背中を押して開けて、

家の中の菜美に声をかけた。

「待って、待って。ほら、体操服！」菜美は慌てて、玄関までの短い廊下を走った。

「もう、慌てるから、忘れるでしょ？気を付けて行くのよ。」

「はい。」絵美は、菜美から体操服を受け取ると、マンションの通路を

エレベーターに向かって走りだした。

「走っちゃだめだって！・・・もう・・・」

菜美はそう言いながら、ランドセルを大きく揺らしながら走って行く娘の、後ろ姿を、嬉しそうに見つめていた。

「あれ？もう行ったの？」

俺がトイレから出て行くと、菜美が外からドアを開けて入ってくるどころだった。

「うん、今。」菜美はそう言って俺を見ると、突然、プツッと吹き出すように笑った。

「ん？何？なんだよ？」

「あははははっ・・・さっき、絵美がね、へパパは？」って聞くから、トイレよって言ったら、へじゃあ、三十分も遅刻するから待ってられない。ママが代わりにキスしてあげて」

って言って、出ていったわ。」

「あっ・・・毎朝三十分もトイレにいる訳じゃないだろうが・・・」
「そうお？でも結構長いかも・・・アハハハハ・・・」
菜美はそう言って、また笑い出した。

三学期が始まっていた。

節子先生は、年末に退院はしたものの、まだ教室には戻れずにいた。

事件以来、代理として、山田先生が、四年三組をみていた。

事件が事件だけに、子供達の心のケアには万全が期せられたが、幸いにして、子供達の誰一人として、精神的に不安定になったりする様子は見られなかった。

三年生の一年間と、四年生の一学期、このクラスは節子先生がみていた。

その子供達の心は、知らぬ間に〈強く〉なっていた。

人は誰でも、一人になれば、弱いものだ。心も脆い。

それは、大人でも、子供でも、同じだ。

弱いからこそ、お互いを信じ、寄り添って生きることが大事なのだ。

信じ会える家族や友達、愛する人に恵まれば、弱いはずの人が、強くなる。

脆い心が、強くなる。

節子先生は、その事を子供達にしつかりと教えていた。

いや、教えると言うよりも、感じさせていたのだ。だからこそ、
こういう時に、

その強さが出るのだ。

絵美も、その他の子供達も、へみんなで仲良く待っててね」と言
った節子先生の言葉を、
信じて待っていた。

節子先生から子供達に宛てた手紙は、随分と沢山になっていたが、
その全部を、

山田先生がバインダーに綴じ、黒板の横につり下げていた。

子供達は、いつも誰かしら、その手紙を読んでいた。

子供達と、節子先生の絆は、何も変わることなく、そこにあった。

昨日の社会科の時間に、宿題が出された。

「最近の新聞記事から、気になる記事を切り抜いて来る。」
そして、今日、みんなが思い思いの記事を切り抜いてきた。

社会科の時間は、机を並べ替える。グループごとに机を合わせて、
授業を受けることになっていた。

絵美のグループは、男子が三人、女子が四人の七人だった。

配られた大きめの紙に、へ各自が切り抜いてきた記事を張り付け、
その解説や、
感想を、グループで話し合って書く。＼というのが、今日の社会科

の授業だった。

絵美は、〈長崎県の海辺に、大量のイルカが打ち上げられた。〉
という記事を持っていた。

〈その数、約100頭。地元の人たちやダイバーの手によって海に
帰そうとしたが、
半数が死んでしまった。〉そのような記事だった。

「かわいそうなイルカ。でも、どうしてイルカ達は浜辺に來たりしたのか？」

グループで話し合って、そんな感想を記事の横に書いた。

絵美の記事の隣に、男子の一人が、持ってきた記事を、張り付けた。

第四章 「絆」 その三

へ大阪市・建設局で、またも、談合。どこまで続く、官製談合の連鎖。▽

市営プールの改修工事を巡る談合事件の記事だった。

同時に、今回の事件の経緯と同じくらいの扱いで、昨年から次々と暴かれた、談合事件の一覧が載っていた。

そこに、当然の様に、焼却場建設を巡る談合事件として、「昭和建設」の名前があった。

小学生の子供達には、荷が重い記事だった。意味もよく分からず、なかなか感想など書けなかった。

持ってきた男の子が、

「父さんがへ許せないなあ▽って言って読んでたから、気になって持ってきたんだ。」

と言い訳するように言った。

その時、記事と一緒に読んでいた絵美が、黙って立ち上がった。

無言で立ち上がった絵美の、顔色が真っ青なことに隣の女子が気づいた。

「えみちゃん、どうしたの？ねえ、だいじょうぶ？」

その声を聞いて、山田先生が絵美の方を見た。

その瞬間、絵美の身体が、まるで朽ち木が倒れるように、グラツと揺れ、

そのまま机の上に倒れ込んだ。

保健室のベッドの中で、ようやく目を覚ました絵美の目は、焦点が定まっていなかった。

じっと天井の一点を見つめている、青ざめた顔には、いつもの、あの子供らしい絵美の面影は無かった。

まるで表情を失っていた。

絵美のただごとでない様子に、保険医は、救急車を呼んだ。

救急車は、先日まで節子先生の入院していた大学病院へ、絵美を運んだ。

「フラッシュバックでしょう。」

学校の保険医から、倒れた時のいきさつを聞いたあと、精神内科の坂田医師が、そう言った。

人間は、何か恐ろしい体験をした時や、心に大きな負担を受けた時、その恐怖や負担を、無意識に、心の奥底に封印しようとする事がある。

精神が、へこれ以上耐えられない」という時に、無意識のうちに起こす、
一種の心の自己防衛。ところが、この封印されたはずの、場合によっては本人も
忘れていたような体験が、ある時、何かのきっかけで、突然、あたかも今、目の前で
起こっているかのごとく、心の中で再現される。

絵美の心は、去年の父親の会社で起こった事件を、忘れてはいなかった。
マスクミに囲まれて過ごした二日間。

あの時感じた恐怖と、不安が、心の中でじっと息を潜めていた。

父親の会社の名前など、小学三年生の絵美は、あの事件が起こるまで、知らなかった。

ところが、あの事件以降、その会社の名前は、いたるところから聞こえて、
そこから連鎖するように、いろんな事が、絵美に襲いかかった。

社会科の授業中、その名前を新聞に見つけたとき、絵美の心の中で、
あ

あの時の恐怖がまざまざとよみがえってしまった。

父親の事件の当時は、気持ちが張っていた。その後も、絵美なりにいろんな事を
乗り越えて来たのだろう。この学校へ転校して来て、間もなく、あの恐ろしい事件
にも巻き込まれた。

気丈で、明るく見えてはいたが、心のずっと奥深くに、耐えに耐えたものが

封印されていたのだ。

学校からの知らせで、菜美が病院に駆けつけた時、絵美は大好きなママを目の前に

しながら、一言の声も出さなかった。

声が出ない、のではなかった。

〈心をなくした〉そんな感じだった。

へこの夏、この子の目前で起こった事件の恐怖も、きつとどこかで、繋がっているの

でしょう。〽と、坂田医師が言った。

二日間、絵美はほとんど何も話さなかった。

ベッドの上から、窓の外をじっと見つめていたかと思うと、いつの間にかウトウトと

眠りについたりしていた。時折、何かに怯えるように布団の中に潜り込んだりする以外に、

特別の感情も見せなかった。

ところが、三日目の朝になると、急に元気になった。

菜美との会話も、仕事を休んで側にいた俺とも、普通に話が出来た。

この二日間の様子がまるで嘘のようだった。

「おや、絵美ちゃん、随分元気になったね。それくらい元気が出てきたら、

もう大丈夫かな、明日にでも退院出来るようにしようね。」

坂田医師は絵美にそう言って笑いかけた。絵美も素直に喜んで、「じゃあ、明日から学校に行っていく？」とそんなことも聞いた。

「うーん、そうだね。お父さん、お母さんと相談して決めようね。もう二三日はおうちでゆっくりしてからの方がいいかもね。」

坂田医師はそう言って、病室を出ていった。その後で、担当の看護師が

「先生がお話があるようなので、診察室へおいで下さい。」と、菜美と俺を呼びに来た。

二人で、診察室に入ると、奥の方から「どうぞ、お掛け下さい。」と坂田医師の声がした。

「随分しっかりしたお嬢さんですね。とても、小学四年生には見えませんね。

うちの子供なんか六年生ですが、ほんとに頼りなくって、絵美ちゃんの方が余程しっかりしていますよ。」

勧められたパイプイスに腰掛けた俺と菜美に向かって、坂田医師は、そう言っ
て、感心したように微笑んだ。

「そうですか、そんな事はないでしょうが・・・ありがとうございます。」

「ところで、絵美さんの容態ですが・・・今日は、あんなに元気になりました。」

「安心と言うところですが・・・」坂田医師はそこで一度言葉を切った。

「まだ治ったわけではない？」俺は菜美をチラッと見てから、尋ねた。

「はい。恐らく・・・今後も、またいつ、今回のような事になるか・・・それは、私にもわかりません。」

「そうですか・・・先生、親としてどうすれば・・・、いったいどうしてやればいいのでしょうか？」

俺は涙ぐんで俯いた菜美の背に、そっと手をやりながら、坂田医師の返事を待った。

「とりあえず、しばらくは様子を見ましょう。・・・このまま何事もなく過ぎて行くかも知れませんが、またすぐに、何らかの兆候が出るかも知れません。」

なんとも言えないのです。実際の所、へ人の心の中というものの程、不思議なものはないですから。」

「今しばらくは、経過を見るほかありません。」

坂田医師はそう言うと、改めて俺の目を真正面から見ながら言った。

「どんな事でもご相談下さい。最善を尽くします。」

第五章「別居」 その一

絵美が退院して、一週間が過ぎた。

昨夜、この冬初めて、まとまった雪が降り、町を白く染めた。今朝もまだ、街路樹は、雪をかぶっていた。

絵美の退院後、二日間、俺は、仕事を休み、家に居た。

今も、学校は休ませたままだが、俺の見たところ、絵美の様子に、変わったところはなかった。そろそろ、学校に行かせてもいいかもしれないと思った。

この一週間、菜美は一日中、絵美の側を離れようとしなかった。

朝、絵美が目覚ますと、洗面、着替え、食事、テレビ。絵美が何をしているときも、じっと絵美を見つめ、その表情の変化を、一瞬も見逃すまいとした。

今日、仕事から帰った俺に、菜美が言った。

「ねえ、あなた・・・お願いがあるんだけど。」

「ん？何だ？」

「うん・・・」菜美は自分から言い出したことを、妙に口ごもった。

「どうした？言いかけてやめるなよ。・・・何だ、頼みて？」

「ちよっとね、・・・そう、少しの間でいいの、萩へ帰っちゃだめかな？」

菜美はそう言うのと、本当に申し訳なさそうに俺を見て、それから、ふと目をそらした。

「離れて暮らすのか？絵美のため？」俺は予期せぬ菜美の頼みに、動揺した。

「うん、そう。」

「どうして？絵美の様子、あれから、変わったことないだろう？」

菜美は、俺の問いかけに応えず、台所へ向かい、背を向けて言った。

「絵美ね、表に出るのが怖いみたいなの。学校も、もう行きたくないって。あんなに好きだった学校に、もう行きたくないって・・・」菜美はそういいながら、両手で顔を覆うと、肩を振るわせた。

「・・・ごめんね、だめかな？・・・絵美にね、今日聞いたの。へ少しの間、萩のおばあちゃんのところへ行く？」って

「絵美は行くと？」

「うん、・・・行きたいって。」

俺は台所へ行き、菜美を背中から抱きしめた。

「・・・あの子ね、こっちで怖い思いばかりしてるの。ずっと、何度もよ。」

「そうだね。」俺は言葉がなかった。

父親の一件、あの教室での恐怖、そして、また入院。

幼い絵美には、余りにも辛すぎる、過酷な出来事ばかりだった。それが、全部、この大阪で起きていた。

〈行くな〉とは、言えなかった。

「いつ？」

「明日。いい？」

「明日？もう決めたの？」

「うん、ごめんなさい。でも、早いほうがいいと思って。」

「そうか・・・キップは？」

「まだ。平日だし、大丈夫よ。」

「そうか・・・何時？」

「午前中の新幹線にしようと思ってる。」

「送るよ。」

「うん。・・・ありがとう。・・・あなた、ごめんね、ほんとに、ごめんね。」

「仕方がないよ。それが、絵美のためなら、仕方がない。一番可哀想なのは、絵美だからな。」

「ごめんなさい。」

「いいって、どうして菜美が謝るんだよ。」

「だって・・・ごめんね。」

菜美は、俺の腕の中で、崩れるように泣いた。

その夜、菜美が「抱いて。」と言った。

言いようのない寂しさを、紛らわすように、抱き合った。

菜美は、何度も俺の名を呼び、狂おしい声をあげた。

細い腕で、俺を抱きしめ、離そうとしなかった。

俺は、忌まわしい出来事の、全てを忘れたくて、菜美を求め続けた。二人が、泥のような眠りについたのは、もう明け方に近かった。

新大阪へ向かう途中、俺たちは、ほとんど何も話さなかった。

静かな時間の中、何故か急に、へもう帰ってこないかも知れないと、そんな恐ろしい予感に襲われた。必死でそのへ馬鹿げた予感へを打ち消そうとしたが、俺の頭の中では、黒くおぞましい渦が、ぐるぐると回り始めた。

《菜美、行かないでくれ。》そう言いたかった。だが、どうしても、

言えなかった。

新幹線は、定刻通りにホームを滑り出し、俺と菜美との距離を、無情な速度で、引き離れた。真冬の風が、長いホームを吹き抜けた。

第五章「別居」 その二

菜美からは毎日、連絡がきた。絵美の体調の報告と、俺の身の回りの心配。

菜美は、〈節子さんが、毎日メールで励ましてくれるの。〉と言っていた。

節子先生は、いまだにリハビリをしながら、自宅での静養を続けていた。

自身が大変な中で、絵美と菜美のことを、心配してくれている。

メールでも、電話でも、菜美は最後に決まって、「ごめんなさい。」と付け足した。

俺は、「気にするな、大丈夫だ。」とその度に言ったが、菜美は可哀想なくらい、全てを自分のせいにした。俺は、絵美の心配はもちろんだが、菜美の心労を思うと、すぐに萩へ飛んでゆきたい気持ちになった。だが、仕事がそれを許さなかった。

菜美が絵美を伴って、萩に帰ってから、十日が過ぎた頃、夜の電話で、菜美が、

「帰ろうと思うの。」と言ってきた。

「絵美の体調も良くて、心配は無さそうだから。」

菜美の言葉に、俺はあやうく涙ぐみそうになった。

「そうか、帰って来られるか。よかった。」

「うん。明後日の金曜日に帰ろうと思ってる。」菜美も、電話の向こうで、涙ぐんでいた。

「そうか、わかった。・・・そうだ、迎えに行くよ。」

「ありがとう。朝から出るから、たぶん、そう、四時くらいには、新大阪に着きます。」

「違うって。・・・俺がそっちに迎えに行くんだよ。」

「えっ、こっちへ？・・・そんなのいい、大丈夫だって。」

「いや、行く。お義母さんにもあいさつしたいし、それに、少しでも早く会える。」

「でも、大変よ。お仕事は？」

「大丈夫だよ。明日、そっちへ向かう。新幹線で行くよ。夕方には着くようにするから。」

「あなた・・・ありがとう。でも、無理しないでね。」

「ああ、大丈夫だって。」

「うん、じゃあ、明日ね。待ってる。」

「うん、昼過ぎの列車になるよ。出る前に連絡するから。」

「うん。わかった。」

「菜美、会いたかったんだ。」

「うん。・・・私も・・・会いたかった。あなた・・・いろいろ、ごめんね。」

「ばか、いちいち謝るなって言っただろ？じゃあ、明日な。」

「うん。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

新山口から、萩までは、レンタカーを使った。一晚借りて、帰りにまた新山口で返す。

在来線で行くことも出来たが、明日、三人で移動するには、レンタカーが便利だった。

実家の前の道で、菜美と絵美が、待っていた。

「絵美、元気だったか？」家の前の狭い道に、目一杯、左に寄せて、車を止めた。

狭いスペースから体を這い出すように降りた。目の前で、絵美が腕組みをして立っていた。

「パパ！遅いよ。」

「ごめん、ごめん。思ったより、結構かかるんだ。」絵美にそう言ったあと、俺は、絵美の傍らで、もう涙ぐんで立っている菜美に向かって言った。

「菜美、来たぞ。」

「うん。」菜美は、たった一言、そう言うと、俺の首に抱きついた。「あゝっ、ママ、ずるいよ。」絵美がそう言って、菜美を真似るように、俺の腰に抱きついた。俺は、右手で菜美を抱きしめ、左手で、絵美の頭を抱いた。

涙が止まらなかった。

義母と菜美が、並んで台所に立っていた。夕食の支度が出来るまで、俺は、絵美とテレビゲームで遊んだ。可愛いキャラクターのRPGだったが、実際、俺にはよくわからず、絵美が遊ぶのを見ていたと言う方が、正確だった。

「サッカーゲームはないのか？」と言うと、菜美が、「女の子は、しないんじゃないの？」と言って笑っていた。

義母と絵美が、奥の義母の寝室で一緒に寝た。こちらへ来てから、ずっとそうしていたらしく、菜美は玄関脇の間で、ひとりで寝ていたと言う。布団が足らず、俺は菜美と一つ布団で眠ることになった。

「疲れてるのに、狭くて、ごめんね。」菜美はそう言って詫びたが、俺は、かえってうれしかった。

「いや、この方がいい。こうして眠るのは、久しぶりだから。」

俺は、菜美に腕枕をし、肩口からかおる菜美の髪の毛の香りを、愛おしく味わいながら、知らぬ間に、深い眠りに墜ちた。

「気をつけてねえ。えみ、元気でな。また、おいでよ。」車の窓越しに、義母が、絵美の手をとって、別れを惜しんだ。

「うん、おばあちゃん、ありがとう。冬休みにまた来るから。」絵美は両手で、祖母の手を握っていた。

「お母さん、ありがとう。・・絵美、ほら手。危ないよ。」菜美は、母親に手を振ると、俺を見た。〈行きましょうか〉

「それじゃあ、お義母さん、帰ります。ありがとうございました。お元気で。」俺は、ゆっくりと車を出した。義母は、俺たちの車が角を曲がるまで、見送ってくれていた。

新山口に着いたのは、昼過ぎだった。

12時6分の列車が出たあとで、次ののぞみまで、少し時間があつた。

駅前の喫茶店に立ち寄った。絵美と菜美は、大きめのチョコレートパフェを分け合いながら食べていた。

「パパ、食べる？」絵美がアイスクリームをすくってくれた。チョコレートアイスは、

あまり好きではなかったが、絵美が可愛くて、ありがたくもらっておいた。

なんとも言えず、甘かった。すぐに、アイスコーヒを飲んだ。その様子を見て、菜美が優しく笑った。

「もうそろそろ？」菜美が言った時、列車まであと15分だった。「うん。行こうか。」俺と絵美は先に店を出た。菜美がレジを済ま

せ、出てきた。

喫茶店の前から、駅に向かって、信号を渡った。
俺の後から、菜美と絵美が手を繋いで渡ってきた。

第五章「別居」 その三

駅の正面玄関に着いたとき、俺の後ろで、菜美が声をあげた。

「絵美、どうしたの？」

振り返って見ると、菜美がひざまずく様に、うなだれる絵美の顔をのぞき込んでいた。

「ん？どうした？」俺は、二人のところまで戻った。

「絵美が・・・ねえ、絵美、気分悪いの？」菜美の問いかけに、絵美は応えず、うなだれていた。

「どうした？」俺はそう言いながら、絵美の顔をのぞきこんだ。

血の気のない、真っ青な顔色だった。

「おい、菜美、いったい・・・」

「絵美！絵美！どうしたの！」菜美が絵美の肩抱いて、声をかけた。

絵美は、ただその場に立ちつくしたまま、血の気のない顔をあげた。

「ママ、怖い。・・・あの人が来る。あそこはイヤ。」絵美が小さく指さした。

絵美の指さす先には、新山口の駅が、あった。

絵美は何かに怯えていた。ひとまず、駅前のベンチに座らせた。自動販売機で

冷たいお茶を買い、飲ませた。顔色は、少し戻ってきたが、まだ、立ち上がることは出来そうになかった。

「駅を見て、怯えた？大阪へ帰ることが、そんなに怖いのか？」俺は、途方に暮れた。

「あなた、このまま、もう少し様子をみるわ。」菜美はじっと絵美の手を握って、

絵美の隣に、座っていた。

「そうだな。しばらくここにしよう。」

一時間近くそうしていた。絵美の顔色は、ようやく、もとに戻った。

「絵美、大丈夫？」菜美の問いかけに、「頭が痛い。」絵美はそう言って、

菜美の胸元に顔をうずめた。

「今日は、無理だな。」俺は、菜美の横に座り、菜美の肩を抱き、絵美の頭をなでた。

返したばかりのレンタカーをもう一度借り、来た道を引き返した。

「ごめんなさい。」車が動き出してすぐ、後部座席から、絵美が、弱々しく、言った。

「絵美、気にしないでいいんだぞ。まだ、気分悪いか？無理に話さなくていいぞ。」

菜美は後部座席で、寄り添うように、絵美の肩を抱いていた。

「あなた、今日帰るの？」

「いや、今夜はもう一晚、お義母さんに、お世話になるよ。」

「そう、よかった。・・・ごめんね。お仕事、大丈夫？」

「そんなこと、気にしなくていいよ。・・・菜美、今夜はゆっくり休もう。」

これからのことは、明日、また話そうな。」

「うん。わかった。」

バックミラーで見た、菜美の表情は、言いようのない不安と、疲れで、

少し青ざめていた。俺自身も、ひどく疲れていた。

俺は、時折バックミラーで、二人の様子をうかがいながら、車を走らせた。

萩への道は、今朝走った時とは違い、ひどく長く感じた。

途中で、菜美が母親に電話をし、簡単に事情を説明した。

引き返してきた俺たちを、義母は、何も言わず迎えてくれた。

夕食の準備を始めた義母を見て、俺は菜美に言った。

「みんなでどこかに食べに行こう。」

「いいの？疲れてない？」

「疲れてるのは、俺だけじゃないよ。菜美こそ、大丈夫か？」

「うん、大丈夫。」

「そうか、・・・寿司は？どこか近くにないか？・・・あつ、廻るやつな。」

菜美が、くすつ、と笑った。「あるよ。近くに、廻るのが。」

「絵美、寿司食へに行くか？クルクルって廻るやつ。」

「おばあちゃんも一緒？」

「ああ、もちろん。」

「じゃあ、行く。アイスも食べていい？」

「ああ、いいよ。何でも好きなだけ食べていい。」

「やったあ。」絵美は、この家に帰って来たとたんに、急に元気になった。

不思議でもあり、寂しくもあった。

絵美の心の傷は、俺の想像の及ばない、恐ろしく深いもののように思えた。

その夜、菜美が俺を求めた。

俺は菜美を抱いた。別室の義母と娘を気遣って、菜美は声を殺した。

眠りに墜ちる前に、少しだけ話をした。

俺は、明日、自宅へ戻る。菜美と絵美は、このまま、しばらくここで暮らす。

月曜、俺が坂田医師を訪ね、今後の治療について、相談してくる。それだけのことを、とりあえず、決めた。

まだ、夜が明けきらないうちに、目が覚めた。

俺が目覚めた気配に、菜美も、目を覚ましてしまった。

「ごめん、起こしたか？」俺は、布団の上にあぐらをかいて座った。

「ううん、いいの。何度も目が覚めて、今も、半分起きてたから。」

「眠れなかった？」額にかかる、菜美の髪を指先で直してやった。

「・・・大丈夫。気にしないで。」

「大丈夫って、顔じゃないぞ。・・・また、しばらく会えないかもな。」

「うん。」菜美は布団の中から、上目遣いに、俺をじっと見た。

「出来るだけ早く来るから。」菜美の額にキスをした。

「うん。・・・ごめんね。」

「ほら、また謝る。もう、それ、なしにしろ。」

「ごめん、・・あつ」菜美が口元を押さえた。

「ははは。」菜美の仕草が、おかしく、まだ暗い部屋で、俺は声を出して笑った。

そして、ふっと、笑顔を見せた菜美の上に、覆い被さった。

横になったまま、長い長いキスをした。

カーテンの向こうに、朝の光がやってくるまで、俺たちは、ずっと、

抱き合ったままで過ごした。

土曜の午後、俺はまた、独りになった。

新幹線の中では、ほとんど、死んだように眠った。

新大阪に着いた時、人の降りる気配で、起きた。

菜美と、絵美を、連れて帰ってくるはずの旅だったが、ただ、疲れだけを持ち帰った。

日曜から、溜まった仕事に追われた。月曜に行くつもりは病院は、坂田医師の都合で、

水曜日になった。だが、それは、俺にとっても、仕事の面で助かった。

〈水曜の1時〉指定された時間に出向いた。絵美の様子を、しっかり伝えるために、

あらかじめメモを用意した。

絵美の様子、仕草、言葉、出来るだけ正確に伝えたかった。

その上で、どうすれば、絵美に負担なく、家に帰すことが出来る

のかを、
教えてもらいたかった。

第五章「別居」 その四

俺から、一通りの説明を聞いた後、坂田医師が言葉を選ぶように、話し始めた。

「随分大変でしたね。お疲れでしょうね、あなたも、奥さんも。」

「ええ、正直、疲れました。特に妻が・・・私は、疲れたと言うより、

困惑したといえますか・・・。」

「そうでしょうね。わかりますよ。」坂田医師は、一度机の上の書類に視線を落とした。

そして、もう一度俺の方に向き直って続けた。

「・・・まず、絵美ちゃんが、なぜそうなったのか？

私の考えをお聞きいただきましょうか。」

「はい。」

「絵美ちゃんの中に、本人も自覚しない、四つの感情があると思うてください。」

「・・・四つ。自覚しない感情ですか？」

「そうです。四つです。正確に言うと、二つ×二つの四種類。」

「はい、それは、どういうことでしょうか？」

「まず、場所に関しての二つの感情があります。これは、わかりやすいでしょう。」

「大阪と萩、ですか？」

「そうです。おわかりのように、この大阪では、恐ろしく、辛く、哀しいことが重なりました。まだ、小学生の絵美ちゃんには、これ以上ない過酷な経験です。いや、大人でも、なかなか平常心では居られないでしょう。」

「はい。それは、よくわかります。」

「それを、小学生の女の子が耐えた。普通、耐えられるはずがないのです。」

「・・・」

「それに、対して、萩では、大好きなお母さん、おばあさんと、静かに楽しく暮らせた。何にも恐れることはなかった。」

「はい・・・」

確かに、まだ小学生の絵美に、〈大阪〉は過酷すぎる場所だった。

「それは、私にもよくわかります。・・・先生、あとのふたつは何でしょう？」

「ええ、今からお話します。あなたには、少し、辛いお話になると思いますが、よろしいですか？」

「あっ、・・・はい。先生、どうぞ、お話下さい。」

俺は、無意識にこぶしを握りしめていた。手のひらが汗ばんでいた。

ポケットからハンカチを出し、拭った。

「まず、これは、絵美ちゃん自身も全く意識していない感情、したがって、絵美ちゃんにもコントロール出来ない感情だご理解下さい。」

「はい。」

坂田医師は、穏やかな視線で、俺の目を見て、また、ゆっくりと話し始めた。

「あなたに対する、絵美ちゃんの気持ちです。」

「まず、一つは、あなたを信頼し、好きだという気持ち。今までに伺ったところ、また、絵美ちゃんがあなたに示す態度などから、絵美ちゃんが、あなたを信頼し、あなたと母親が睦まじく過ごすことを、喜んでいるのは間違いないと思います。」

「はい。」

「その一方で、絵美ちゃんには、あなたを憎む感情、遠ざけたいと思う感情があるようです。」

「……」

「強い言葉で申し訳ないと思います。・・・だが、恐らく、間違いはないでしょう。」

「憎む、ですか？」

俺は出来るだけ冷静でいようと思った。こぶしを膝の上に置き、じつと、

坂田医師の話の続きを待った。

「あなたに対してでもあり、全ての男性に対して、でもあるかも知れませんが。」

「絵美ちゃん的生活を一変させた父親、教室で自分や先生を襲った男、

そして、大好きなママを奪ったのも男性です。」

「・・・絵美ちゃんは、お母さんが大好きなんでしょう。優しくて美しいお母さんは、実の父親には愛情を注いだりしなかったのですよ。」

だから、いわば、絵美ちゃんが、ママの愛情を独占できた。・・・そこへ、ある日、あなたが現れた。」

「母、娘、祖母、三人で静かに暮らし始めた萩へ、突然、あなたが現れた。」

「ママは、あなたを愛していた。かといって、絵美ちゃんへの愛情が減ったと言うのでは
ないでしょう。それは、あり得ない。・・・だけど、絵美ちゃんの意識の下では、
そうは思っていないのかも知れません。」

「絵美ちゃんは、これらの矛盾する感情に、翻弄されているのですよね。」

坂田医師は、また穏やかな視線で、俺を見た。俺は、その目をじ

っと見つめ返して、
やっとの思いで、口を開いた。

「先生、・・・どうすればいいとお考えですか？絵美の、その、辛い状態は、
いったい、いつまで続くのでしょうか？」

「いつまで・・・そうですね、これから絵美ちゃんは思春期に入ります。
ます。

一般的にも、一番感情のコントロールが難しい時期です。個人差はありますが、
中学を出る十五才。高校卒業の十八才、その辺りで、大人の心になるのが一般的です。」

「絵美ちゃんは、なかなか聡明な女の子ですから、場合によっては、もっと早く、
落ち着くかも知れません。」

「絵美ちゃんは、過酷な経験をしたのです。心のコントロールを失ったとしても、
何の不思議もないように思います。それでも、時間がたてば、人は、辛い経験も、
忘れていくことが出来るのです。」

「・・・いずれにしても、今は、・・・当分は、萩で、暮らすのがいいと思います。
そうすれば、特に体に不調が無い限り、通院などは必要ないでしょう。

あなたにとっては、お辛いことと思いますが、今はそうなさるのが、絵美ちゃんのためだと、私は思います。」

病院を出て、フラフラと歩いた。

車は、まだ病院の駐車場に置いたまま、近くの喫茶店へ入った。ソファークタイプの席に、倒れ込むように座った。

アイスコーヒーを頼み、タバコに火をつけた。

あの時、新山口の駅で、絵美が駅を指さして言った。へあのひとが来る。

あれは、実の父親の影か、あの学校で死んだ犯人のことだ、思っていた。

その幻覚だと。

だが、それは、俺自身でもあった。

坂田医師の話は、わかりやすく、いかにも正鵠を得ているようだった。

それだけに、俺には、辛過ぎた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3726b/>

『めぐり愛』（続・夏の奇跡）

2010年11月8日09時36分発行